

声に出して読む万葉集 第四十六回

叙景歌人 山部赤人 其の三

卷六 雑歌（つづき）

九四二

〔題詞〕 辛荷の嶋を過ぐる時に、山部宿祢赤人の作れる歌一首〔并短歌〕

〔原文〕 味澤相 妹目不數見而敷細乃枕毛不卷 櫻皮纏 作流舟二真梶貫 吾榜来者 淡路乃野
嶋毛過 伊奈美孀 辛荷乃嶋之嶋際從 吾宅乎見者 青山乃曾許十方不見 白雲毛 千重尔成来
沼 許伎多武流 浦乃盡 往隱 嶋乃埼々 隈毛不置 憶曾吾来 客乃氣長弥

〔訓読〕 あぢさはふ 妹が目離れて 敷栲の 枕もまかず 桜皮巻き 作れる船に 真楫貫き 我が漕
ぎ来れば 淡路の 野島も過ぎ 印南孀 辛荷の島の 島の際ゆ 我家を見れば 青山の そことも
見えず 白雲も 千重になり来ぬ 漕ぎ廻むる 浦のことごと 行き隠る 島の 崎々 隈も置かず

思ひぞ我が来る 旅の日長み

▽語釈

辛荷の島Ⅱ兵庫県揖保郡御津町の沖合の唐荷三島。播磨国風土記に、韓人の船が難破し、その荷物が漂着したので「韓荷島」というとある。

あぢさはふⅡ「妹が目」にかかる枕詞。アヂガモが夜昼網の目にかかると言うが、未詳。
桜皮Ⅱ樹皮を舟など物に巻いて補強するために用いる植物。カバノキ科のシラカバか。
伊奈美孀Ⅱ兵庫県高砂市の加古川河口付近の地。『播磨国風土記』に妻が隠れたという伝説を持つ。

隈も置かずⅡ曲がり角ごとに。

九四三 反歌

〔原文〕 玉藻苺 辛荷乃嶋尔 嶋廻為流 水鳥二四毛有哉 家不念有六

〔訓読〕 玉藻刈る唐荷の島に島廻する鵜にしもあれや家思はずあらむ

九四四

〔原文〕 嶋隠 吾榜来者 乏毳 倭邊上 真熊野之船

〔訓読〕 島しま隠かくり我が漕わぎ来くれば羨としかも大和やまとへ上のぼるま熊野くまのの船

▽語釈

島隠りⅡ島蔭に隠れる。

ま熊野の船Ⅱ熊野産の船。

九四五

〔原文〕 風吹者 浪可將立跡 伺候尔 都太乃細江尔 浦隱居

〔訓読〕 風吹けば波か立たむとさもらひに都太つだの細江ほそえに浦隱うしじもり居をり

▽語釈

さもらひⅡサは接頭語。モラヒは、見守る意の動詞モリに反復・継続の接尾語ヒのついた形。様子伺いながら機を待つ。人に仕え、また、風波の静まるのを待ち、あるいは恋人に会う折を待つさまなどという。

都太の細江Ⅱ姫路市飾磨区の飾磨川河口。

浦隱りⅡ「浦」は湾曲して陸地に入り込んだ所。

九四六

題詞 敏馬みぬめの浦を過ぐる時に、山部宿祢赤人の作れる歌一首〔并短歌〕

〔原文〕 御食向 淡路乃嶋二直向 三犬女乃浦能 奥部庭 深海松採 浦廻庭 名告藻苅 深見流乃
見卷欲跡 莫告藻之 己名惜三 間使裳 不遣而吾者 生友奈重二

〔訓読〕 御食みけ向ふ淡路の島に直向ふ敏馬の浦の沖辺には深海松採り 浦廻にはなのりそ刈る 深海松の 見まく欲しけどなのりその おのが名惜しみ 間使も 遣らずて我れは 生けりともなし

▽語釈

御食向ふⅡ淡路にかかる枕詞。食膳の食物が向かい合っていて、その中にあぢ（トモエガモ）・

栗・葱き・蜷みななどがあることから、同音を持つ地名にかかる。

深海松Ⅱ海の深い所に生えている海松。

間使ひⅡ二人の間を行き来して言葉を伝える使。

九四七 反歌

〔原文〕 為間乃海人之 塩焼衣乃 奈礼名者香 一日母君乎 忘而将念

〔訓読〕 須磨あまの海女あまの塩焼きぬき衣の慣なれなばか一日ひとひも君を忘れて思はむ

▽語釈

慣れⅡ着物が古びてよれよれになる。

〔左注〕 右は作歌の年月未だ詳らかならず。但し類を以ての故に、この次に載せたり。

一〇〇一

〔題詞〕（春三月、難波宮に幸しし時の歌六首）

〔原文〕 大夫者 御獵尔立之 未通女等者 赤裳須索引 清濱備乎

〔訓読〕 大夫は御狩に立たし娘子らは赤裳裾引く清き浜びを
ますらを みかり をとめ あかもすそひ

〔左注〕 右一首、山部宿祢赤人作。

一〇〇五

〔題詞〕 八年丙子夏六月幸于芳野離宮之時山邊宿祢赤人應詔作歌一首〔并短歌〕

〔原文〕 八隅知之 我大王之 見給 芳野宮者 山高 雲曾輕引 河速弥 湍之聲曾清寸 神佐備而見
者貴久 宜名倍 見者清之 此山乃 盡者耳社 此河乃 絶者耳社 百師紀能 大宮所 止時裳有目

〔訓読〕 やすみしし 我が大君の 見したまふ 吉野の宮は 山高み 雲ぞたなびく 川早み 瀬の音
おと

ぞ清き 神さびて 見れば貴くよろしなへ 見ればさやけし この山の 尽きばのみこそこの
かむ たふと
川の 絶えばのみこそ ももしきの 大宮所 やむ時もあらめ

▽語釈

よろしなへⅡナへは助詞。心を寄せるとともに。心を寄せると同時に。

一〇〇六 反歌

〔原文〕 自神代 芳野宮尔 蟻通 高所知者 山河乎吉三

〔訓読〕 神代より吉野の宮にあり通ひ高知らせるは山川をよみ

▽語釈

高知りⅡ立派に治める。

卷八 春雑歌

一四二四

〔題詞〕 山部宿祢赤人歌四首

〔原文〕 春野尔 須美礼採尔等 来師吾曾 野乎奈都可之美 一夜宿二来

〔訓読〕 春の野にすみれ摘みにと来し我れぞ野をなつかしみ一夜寝にける
つこ ひとよね

一四二五

〔原文〕 足比奇乃 山櫻花 日並而 如是開有者 甚戀目夜裳

〔訓読〕 あしひきの山桜花日並べてかく咲きたらばいたく恋ひめやも

一四二六

〔原文〕 吾勢子尔 令見常念之 梅花 其十方不所見 雪乃零有者

〔訓読〕 我が背子に見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪の降れば

一四二七

〔原文〕 従明日者 春菜将採跡 標之野尔 昨日毛 今日母 雪波布利管

〔訓読〕 明日よりは春菜摘まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ

一四三二

〔題詞〕 山部宿祢赤人歌一首

〔原文〕 百濟野乃 芽古枝尔 待春跡 居之鶯 鳴尔 鷄鵲鴨

〔訓読〕 百濟野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも
くだらの ふるえ

卷八 夏雑歌

一四七一

〔題詞〕 山部宿祢赤人歌一首

〔原文〕 戀之家婆 形見尔将為跡 吾屋戸尔 殖之藤浪 今開尔家里

〔訓読〕 恋しけば形見にせむと我がやどに植ゑし藤波今咲きにけり

卷十七 (部立せず)

三九一五

〔題詞〕 山部宿祢明人、春鶯を詠める歌一首
うぐひす

〔原文〕 安之比奇能 山谷古延氏 野豆加佐尔 今者鳴良武 宇具比須乃許恵

〔訓読〕 あしひきの山谷越えて野づかさに今は鳴くらむ鶯の声

▽語釈

野づかさ Ⅱツカサは塚のように高い所。野の小高くなった所。

〔左注〕 右は、年月所處、未だ詳審なることを得ず。但、聞きし時のまにまにここに記し載す。